

## シカゴ学派社会学の理論的視点

宝月 誠\*

シカゴ学派社会学は現在でも社会学的イマジネーションを得るひとつの宝庫である。本稿はシカゴ学派の検討を通じ、社会についての理論的視点と分析方法を考察することにある。理論的視点として「社会的世界論」を提唱するが、それは意味世界と態度取得の理論、プラグマティズムの行為論をベースにしながらも、社会関係や資源論も取り込んだ視点である。こうした視点に基づいて社会的世界の特徴を把握するには、比較やシステム分析、関係的思考が重要となる。さらに、社会的世界の生成過程の分析は、因果分析よりもメカニズムの把握、そして変数分析ではなくて過程の中に行為を復権させ、行為や社会過程の条件依存の状況を特定化することが課題となる。

キーワード：シカゴ学派社会学，社会的世界論，行為，メカニズム，過程分析

### はじめに

社会について語るには社会のイメージ（理論的視点）とそれを経験的に確認する方法が必要である（Becker, 1998: 17-18）。シカゴ学派は、こうした視点と方法が比較的良好に統合されており、またそれらに基づいて興味深いモノグラフを数多く生み出してきた。この点でシカゴ学派は、理論的視点に関しても、経験的研究の面においても、有益な示唆を引き出しうる宝庫である。もちろん、現代の社会学理論や方法論はシカゴ学派よりもはるかに洗練されたものも多いが、依然としてシカゴ学派から学ぶ点が多い。特に社会生活を問題状況の解決過程として捉

え、社会的・文化的・地理的環境の下で営まれる社会生活の生きた姿を行為者たちの行為によって捉え、さらに社会生活の生成過程を段階を追って丹念に把握しようとする視点は魅力的である。

こうした可能性を秘めたシカゴ学派に本稿は焦点を定め、そこから一つの社会についての理論的視点を構築しようとするものである。本来、視点と方法論とは切り離すべきではないが、本書ではまず理論的視点を中心に論を進め、最後に分析方法について述べることにしたい。最初にシカゴ学派のなかから代表的な理論的視点と思われるものをいくつか取り出し、それを簡単に検討した後に、新たな理論的視pointsの構築に取りかかりたい。もっとも、シカゴ学派の視点自体は多様でいろいろなものが入り交じっており、これがシカゴ学派の代表的あるいは

\* 立命館大学産業社会学部教授

正統な視点であるとはいえない。本稿が提起する視点はそのなかのひとつであり、それを「社会的世界論」とよぶことにしたい。この視点がどれだけ意義があるものかは、シカゴ学派で蓄積されてきた優れたモノグラフの解釈に、その視点を活用することによって検証されるものである。こうした作業を並行して進めているが（宝月，1990；2007；2008）、本稿では理論的視点と若干の分析方法の検討に主眼をおく。

### 1 初期シカゴ学派の視点<sup>1)</sup>

初期シカゴ学派の理論的視点はトマスとズナニエッキの『ポーランド農民』の「方法論ノート」(2018) やパークとバージェスの『科学としての社会学入門』(1921)、さらに『都市』(1925)などで示され、これらの視点は一連のモノグラフの研究を実質的に導く理論の役割を果たしている（ズナニエッキの重要なテキスト『社会学の方法』1934については後に取り上げる）。

#### トマスとズナニエッキの視点

まず、トマスとズナニエッキの『ポーランド農民』の理論的視点は周知のように社会的価値・態度である。彼らによれば「社会的価値は、ある社会集団の成員に接近可能な経験的内容をもち、それが活動の対象となり、またなりえるという点で意味を有する経験的所与のことである」(Thomas and Znaniecki, 1918-20, Dover edition 1958: 21-23, 訳21)。社会的価値は人間の行為に結びつけて考えると明確になると彼らはいふ。たとえば、食べ物の意味はそれをどのように消費したり味わったりすることができるのかということに準拠しているし、道具

の意味はそれを利用する仕事に、詩の意味はそれによって喚起される感傷的な知的反応に、大学の意味はそれが果たしている社会的活動に、神秘的な人物の意味はそれを崇めるカルトや創始者とみなす人たちの行為に、科学理論の意味はそれによって認められたアイデアや行為によって経験的世界をどれだけコントロールできるのかに依拠している。他方、トマスらによれば、態度は社会的価値に対応する個人の意識過程であって、行為に関連し、行為を通して一定の社会的価値と結びついている。たとえば、食べものに対する志向や美的なもの、科学的なもの、宗教的な価値に対する反応の仕方、制度的なものによって喚起されるものへの反応などである (Thomas and Znaniecki, 1958: 22, 訳22)。

彼らの社会の分析焦点は、特定の社会や共同体や集団に見出される特有の社会的価値と態度を把握し、それらが人びとの行為にいかに影響を与え、さらにこれら一連の行為を通じて社会生活がどのように生成していくのかを明らかにすることにある。彼らは社会的価値や態度を補足的に説明するため、集団の行動規則やその束である社会制度さらに集団の制度全体を示す社会組織の概念や社会解体・社会再組織化のアイデアを、あるいは個人が有する態度のパターンを示すために社会的パーソナリティやその類型を導入している。

トマスとズナニエッキの基本的な視点は明確である。社会は行為を通じて生成するものとイメージされ、その行為は社会的価値と行為者の態度に条件づけられて遂行されるということである。彼らの理論的視点は、社会的価値と個人の意識過程を総合した行為論なのである。

### パークの視点

次に初期シカゴ学派の有力な指導者のひとりであるパークを見てみよう。彼の場合、理論的視点は研究生生活のなかで徐々に変化しているという指摘がなされている (Lengermann, 1997)。レンゲルマンによれば、パークがバージェスとともに編集した有名な『科学的社会学入門』(1921)の時点までは、彼はジンメリアンであり、社会は相互作用のシステムとして把握され、競争と同化、闘争と応化、個人化と凝集性、規範的規制と自発性などの概念を用いて社会の緊張や矛盾さらに変化を明らかにしようとした。その後、1922年から1929年の間はパークにとって最も実りの多い時期で、初期の闘争概念を応用した人種問題、さらに都市研究が展開される。都市はパークのさまざまな集団 (例えばギャング、近隣、都市コミュニティ)の研究の一環であった。都市は物理的・社会的空間、人口、分業、経済的・政治的・文化的要因が交差している自然地域 (natural area) であり、多数の異質なコミュニティから成り立っているが、それ自体独自の統合システムを有する世界である。さらに、レンゲルマンによれば、1930年から1944年の時期はパークの理論的視点は大きく変化するという。その典型的な例は文化概念の変化である。パークはもともと文化を過程的に捉えており、文化は相互作用を一定の形式にパターン化するのと同時に、相互作用によって生み出され変化していくものとみなしていた。しかし、後期では過程的な視点は弱まり、文化は社会に安定性をもたらす大きな力とみなされる。さらに、パークは生物システム概念を発展させ、経済システム、政治システム、文化システムを加えて、これらシステム間の相互連関を分析しようとしている。この段階に至れば、

彼は限りなく構造-機能主義に接近してくることになる。結局、レンゲルマンは、パークの視点が社会闘争から均衡重視へ、個人の主体的な活動力より物理的・文化的拘束力重視へ、緊張をはらんだ複雑な現象から相互補完的で調和的な社会イメージへ、集団などのミクロ分析から国際関係を含むマクロ分析へと、変貌していったとみる。

レンゲルマンによるパークの多彩な理論的視点の変遷の解釈に基づいて言うならば、シカゴ学派としてのパークの魅力は中期までの理論、特に「自然地域」の研究にある。地域に生きる人びとの有り様を、その空間的な広がりの中で、伝統的な文化の影響とその革新、人口密度、人口移動、民族的な異質性、経済状態、生存競争や闘争、集合行動の発生などの多様な面から捉えることで、空間上の人びとの配置など生態学的な秩序にも目を向けて、人間集団を研究している。人間が空間にしめる位置や社会関係は文化的要素とならぶ社会条件の要素となるものであり、パークは人種関係や自然地域によって、人びとの社会生活が条件づけられ、生活のチャンスが異なることを明らかにしている (Park, edited by Turner, 1967)。同時に、コミュニケーションやその技術が社会生活に果す意義を、彼が重視していたことも忘れるわけにはいかない。「コミュニケーションの歴史は文字通り文明化の歴史である」(Park, edited by Turner 1967: 65) という彼の認識は、彼の社会の理論が生態学的基盤のみならず、コミュニケーション過程を取り込んだ幅広い視点であったことを物語っている。

### ミードの視点

初期シカゴ学派のなかで、社会学者ではない

が理論的な面で独自の貢献をなしたのはミードである。有意味シンボルをベースにした彼のユニバース・オブ・デイスコース (意味世界) や制度の理論は社会を意味の観点から把握することの重要性を教えてくれる。ミードの理論から得られる示唆的な視点は主に次の3点である (Mead, 1934)。

第1に、人びとが他者とともに協同して営む人間社会の基盤は、本能ではなくて、有意味シンボルに基づくコミュニケーションにあること。第2に、社会において人びとの間で組織的な行為が可能になるのは、人びとに「一般化された社会的態度」を呼び起こす意味世界 (意味の体系) によるものであること。「一般化された社会的態度」を取得することによって、各自は対象についての共通の意味を呼び起こし、社会の観点から、自らの行為をコントロールし、社会的な人間になる。第3に、人びとは問題状況に直面すると、それを解決するために有意味シンボルを用いて内的な会話を行う。そして、こうした反省的思考を通じて新たな行為を案出する。社会は意味世界によって条件づけられているだけでなく、反省的思考によって新たな行為が創発され、社会は絶えず生成していく。

これらのなかで第2点が特に注目に値する。『精神・自我・社会』において力説しているように、ミードは特定の対象や状況に対するコミュニティ成員の共通の反応に基づいて、遂行される組織的な反応を「制度」とよぶが、この制度の根底には「一般化された社会的態度」を各自が呼び起こす意味世界がある。財産、家族、政府などは制度の例であるが、「社会の諸制度は、集団もしくは社会的活動の組織化された形態であり、——組織化された形態であるために、社会の個々の成員はこのような諸活動に対

する他人の態度をとることによって、適切で社会的な動作ができる」ようになるのである (Mead, 1934: 261-262. 訳276)。例えば、財産という言葉を聞けば、その意味世界 (ユニバース・オブ・デスコース) を共有する人びとは、自らの財産を管理し、他人の財産を尊重しなければならないという「一般化された社会的態度」を呼び起こす。ただし、それは誰しもが同一の行為をすることを意味しない。財産が侵害された場合に、被害者や警察官や判事や陪審員はそれぞれの立場や役目によって具体的な行為の仕方は違っている。けれども、財産を尊重しようという点では、彼らは共通した反応を示しているのである (Mead, 1934: 261, 訳275)。こうした反応を可能にする「一般化された社会的態度」に、ミードは社会での組織的行為の成立の根拠を見いだすのである。従来のミードの紹介は自我論に偏りがちであったが、彼の社会の理論の意義は有意味シンボルや意味世界、「一般化された社会的態度」の取得によって可能となる組織的な反応すなわち制度を説明することにある。

## 2 第一次シカゴ学派から第二次シカゴ学派へ

以上が初期シカゴ学派のなかで理論的な面で特に影響力の大きかったビッグ・スリーの視点を取り上げた。彼らを継承するいわゆる第二次シカゴ学派のなかからもさまざまな理論的パースペクティブが誕生してくる。

### ブルーマーの視点

第一次シカゴ学派から第二次シカゴ学派をつなぐ位置を占めるのはブルーマーである。彼はミード理論の咀嚼からシンボリック相互作用論

を展開する。彼の社会理論の中心は行為である。行為者は他者や自己と相互作用をし、指示と解釈の過程を通じて行為を選択する (Blumer, 1969)。社会を成り立たせているのは行為者たちの絶えざる指示と解釈であり、行為者が対象に対して有する意味が強調される。その半面、ミードが重視した「一般化された他者の態度」の取得は後退し、行為者の組み込まれている社会の意味世界はほとんど解明されていない。だがトマスとズナニエッキの『ポーランド農民』を読み解く場合には、序章で述べられたようなポーランドの農村共同体で支配的な家族規範や婚姻規則、経済的観念、性規範、宗教生活、審美的態度 (Thomas and Znaniecki, 1918-1920: vol.1 87-302), さらに第三部のアメリカに移住した者やその子孫が新たな社会のなかで身につけた労働観や家族観、人生観など (vol.2: 1467-1646), 社会的価値についての知識が必要である。ブルーマーは行為が意味に基づくことを強調しているが、その意味が個人の主観的な意味だけならば、行為の意味の反面しかみていないことになる。意味は単に個人によって主観的に構成されたものではなくて、トマスらが示したような社会的に共有された文化的意味・価値が重要である。

さらに、ブルーマーの理論的視点からはシカゴ学派のモノグラフに不可欠な人間生態学の視点が欠落している。パークは都市住民の生活が地域によって文化的内容も、生活のチャンスも大きく異なることを強調しており (Park, edited by Turner, 1967), 彼の指導に基づいてなされた都市住民の生活に関する一連のモノグラフは地域や空間と関連した研究である。これらに比べ、ブルーマーの行為論は行為の行われる状況の理論を欠いた視点である。

さらに、ブルーマーの理論的視点では行為に際して利用可能な「資源」が行為者にどのように配分されているのかという点は軽視されている。行為の遂行にはなんらかの用具ないし資源を必要とする。行為には物的資源はもとより、知識や情報、権利、信頼、社会関係資本といった多様な資源が必要である。トマスらの『ポーランド農民』では、農民生活を土地、家屋、家畜など生活資源や大家族の相互協力、さらにアメリカ社会での相互扶助組織や教区を単位とする社会的・文化的活動の連携など物的・文化的・社会的資源が生活の組織化・再組織化に果たす役割を認識している (Thomas and Znaniecki, vol.1 Introduction: 87-302, vol.1: 87-156, vol.2: 1511)。それに対して、ブルーマーに限らずシカゴ学派を継承した理論的視点は資源が軽視されることが多い。たとえば、シブタニ (Shibutani, 1986) は意味世界の構成やシンボルの作用に関しては詳しく論じているが、なぜか資源に関する論議はない。

### ヒューズとゴフマンの視点

ブルーマーと並んで影響力の大きかったヒューズも、第一次シカゴ学派と第二次シカゴ学派のつなぎ目に位置する。彼は自らの理論的視点を体系化することを好まなかったが、制度化された社会現象 (例えば規範や組織体) の存在を認め、かつそれを構造ではなくて遂行過程として捉える視点を大切にしていたという (Chapoulie, 1996: 22)。例えば、彼は規範をそれがなにを表明しているのかという点を単に検討することに終わるのではなく、規範を用いる人たちによってそれがいかに解釈され、さまざまな状況でどのように規範が実際に働くのかを明らかにすることを課題にした (Hughes,

1971)。遂行過程を重視した点ではヒューズは確かに中期までのパークの過程論の後継者であったが、シャプリが指摘するようにパークと違ってヒューズには進化論の色彩はなく、それに代わって文化人類学からの影響である文化の相対性を受け入れているという（Chapoulie, 1996: 22）。彼が得意とする社会学的イマジネーションは異質な制度体や文化現象に隠された共通性を見出し、その意味を読み解くことであった。彼の手にかかれば、売春婦と聖職者は秘密を共有するサービス業という点では、同じ「職業」でありながら道徳的評価がなぜかくも異なるのかを問うことである。

ヒューズの影響を受け、彼をはるかに凌駕したのはゴフマンであった。第二次シカゴ学派が生んだ最大のスターである彼は、どん欲な理論渉猟によって多彩な理論を遍歴しており、シカゴ学派のレットルを貼られることをよしとしなかった（Winkin, 1988, 訳56-57, 72頁）。だが、彼の終生の理論的課題である「相互作用秩序」はまぎれもなくシカゴ学派の伝統であり、トマスの「状況の定義」やミードの「態度取得」などの概念につながるものである。また、日常の出会いでの相互作用秩序と精神病院などの全制施設（total institution）の管理秩序など異質な世界を比較する視点は、ヒューズ譲りのものである。彼の社会のイメージは、行為者たちがしるべき「状況の定義」ないし「フレーム」を保つために、相互作用を通じて互いに協力したり、駆け引きをする世界である。出会いの場では相手の面子を考えて、ミスに気がつかない振りをしたり、協力してその場の雰囲気や修復作業を行うことも必要となる（Goffman, 1962）。状況の維持や面子は行為者の意識的な演技を抜きにしては語り得ないが、互いに面子を配慮す

る背後には人格崇拜が一つの社会的な潮流となっていない点を見抜いている。全制施設（アサイラム）は一方で徹底した監視を通じて被收容者の人格的価値の剥奪が行われ、他方で状況への被收容者の巧みな適応が生じる世界であるが、その世界の特異性は人格やプライバシーが尊重される市民生活との対比により鮮明になる。ゴフマンの研究はミクロな世界を対象としながらもマクロな社会制度や文化との関係を常に念頭において展開されている。

#### ベッカーの視点

ブルーマーとヒューズを師と仰ぐベッカー（Becker, 1998: 1, 10）はゴフマンと並ぶ第二次シカゴ学派のもうひとりのスターである。彼の研究領域は逸脱や学校世界、医療など幅広いが、芸術社会学のなかで彼の理論は明確に示されている（Becker, 1982）。

彼の理論的視点は「社会的世界」の概念に示されている。社会的世界（social world）は多様な人びとが関与し広範囲で集合的な行為・活動（activity）が展開される世界であるが、そこには多彩な人材が参加し、物事の扱い方や内容に関するその世界での約束事（convention）が存在する。さらに、その世界では行為者たちの間で闘争や交渉、説得などの相互作用が展開され、外部の人からは彼らの活動を支える資源や技術が供給され、また政府などから保護・援助もなされる。こうした多様な関係者の相互作用を通じて、芸術活動は社会のなかで組織的な活動として展開される。

ベッカーは芸術世界に関与する行為者たちが共有する「約束事」などの意味とともに、「資源」を重視している。シカゴ学派が軽視しがち

な資源を理論的視点に組み込んでいる。さらに、資源は誰にでも配分されているものではないということにも注意を払っている。稀少な資源を誰に配分するのかということは、芸術活動を行う際にも重要な関心事となる。たとえば、革新的芸術活動が芸術界に浸透していくためには、革新グループが芸術活動に必要な資源配分にどれだけ預かれるのかが鍵となるとみる (Becker, 1882: 307-310)。伝統的な芸術活動が有している資源 (たとえばサポーターや芸術仲間) に、革新的芸術が入り込み、それを利用し、協同して、徐々に影響力を強めていく。革新的な芸術活動は斬新なアイデアさえあれば成功するというものではなく、活動に必要な安定した資源に接近し、新たな活動を可能にする協同体制を整えることが必要となる。

### ストラウスの視点

第二次シカゴ学派の有力な人物にはストラウスもいる。彼の理論的視点も「社会的世界」の概念で示される (Strauss, 1978, 1982, 1984, 1993)。もともと「社会的世界」(social world) という概念自体はトマスをはじめシカゴ学派のモノグラフに散見される。もっともそれらは理論的視点というよりは記述的な概念で、特定の地域や集団によって営まれている社会生活を意味している。ジェームス・ショートは、社会的世界の概念が人びとの生活の有様をできるだけトータルに記述し、総括するのに有効な概念であるとみる (Short, 1971: xxxv)。彼によれば、社会的世界は「特定集団やコミュニティ、制度に参加している者たちに経験されているままの生活を描こうと努める点で記述的である」。しかし、この概念により積極的な意義を見出し、社会的世界の概念をもっとも自覚的に展開した

のは、ストラウスであった。(Strauss, 1978; 1993)。

彼は社会的世界を次のように概念化している。すなわち、①社会的世界には優先的になされる特定の活動 (activity) が存在し、②そうした活動はなんらかの空間・場所 (site) で行われ、③そうした活動を遂行するのに技術が活用されている。そして、④当初は一時的なものにすぎなかった分業は次第に発展して、社会的世界において活動は組織されるようになる。⑤こうした社会的世界は発展するにつれてサブ (下位) 世界に分化し、それぞれの世界は自らを正統化するようになる。そして⑥社会的世界は他の社会的世界と、あるいはサブ世界同士が互いに接触し交差する機会も多いが、世界間でさまざまな問題をめぐって交渉や闘争や競争が生じる。そうした政治的活動のなされる空間はアリーナと呼ばれる。⑦社会的世界やアリーナはある程度構造化されていても固定されることはなく、その世界の境界も活動も共にたえず変化していく過程である。

ストラウスのこうした視点は彼の後継者のクラークによって理論的に一段と洗練され、さらに再生科学の世界の発展過程の研究に活用されている (Clarke, 1991; 1998)。彼女にとって社会的世界は集合的行為の基本的な建築用ブロックを構成するものであり、分析の単位でもあり、社会はこうした諸社会的世界のモザイクが相互に関連し、浸透し合うことから成り立っているものである<sup>2)</sup>。

以上、シカゴ学派の主要な理論的視点を駆け足で跡付けてきた。以下に述べる理論的視点はこれらの遺産を活用して展開することになるが、ベッカーやストラウスが用いた「社会的世界」の概念を踏襲して本稿の理論的視点の名称

にしたい。彼らの視点を継承する点が大であるからである。

### 3 社会的世界論の理論的視点

新たな「社会的世界論」の骨子は以下6つの命題として示すことができる。

(1)社会的世界は行為者たちが特定の意味世界の下で、社会関係を構成し、資源を活用してなんらかの行為を遂行している世界である。

社会的世界を構成する基本的な要素は意味世界、行為者、社会関係、資源、社会的行為である。意味世界は有意味シンボルを土台にし、社会的に意味づけられたもろもろの物的・人的・観念的对象を含み、これらの意味によって対象への人のかかわり方が指示されている世界である。行為者は他者からは行為の対象であるとともに<sup>3)</sup>、社会のなかで特定の社会的位置を占め、欲求や理念、行為への構えである態度を有し、また自己意識を持つ行為主体である。社会関係は行為者相互の関係で、共同関係や協力関係、交換関係、競争関係、闘争関係、支配関係、保護関係など多様な関係がある。資源は貨幣や物的資源、人的資源のほかに文化資源や社会関係資本などがある。社会関係資本は特定の社会関係を有することに伴ってその中で利用可能となる有用な資源であり、信頼や情報、コネなどがそれに相当する。

社会的世界論の行為はプラグマティズムの行為論である。すなわち、ヨアス (Joas, 1992) によれば、プラグマティズムは行為を習慣的行為と創造的行為との交代として捉える。習慣的行為は行為者が身につけた一定の反応の仕方の性向であるが、習慣的行為が通用しなくなったとき (問題状況) に、思考を働かせることによ

てその解決を可能にする新たな創造的行為が生まれてくる<sup>4)</sup>。グロス (Gross, 2009: 367) が強調するように、第1にこの問題解決は単に功利的な利益の最大化を目指してなされるのではなく、もっと幅広い事柄の問題解決に用いられるものであり、第2にどのようなことが問題状況とみなされるのかは、文化的レンズを通して行為者たちに解釈されるものであり、第3に多くの行為は功利主義者の想定とは違って習慣的なもので、目的と手段をいちいち意識してなされるものでない。さらに、第4に道具的理性それ自体は一種の習慣で、それは歴史的過程の中で形成され、的確に行為できるよう状況に適合的に配置されたものである。第5に目的や手段は行為に先だってあらかじめ決められたものではなく、行為を遂行している中で行為者は自らを別の視点で見つめたり、資源価値を別様に評価したり、それまで考えていなかったようなことを問題状況に加えたりする。プラグマティズムの行為はこうした点で他の行為理論、たとえば合理的選択理論 (Kiser and Hechter, 1991) とは異なっている。

(2)社会的世界は他の社会的世界と関係を有している。

社会的世界の多くは孤立して存在するものではなく、他の社会的世界との関連の中で存在している。社会的世界相互の関係は社会的世界がより大きな社会的世界の下位世界として属する場合や、一応独立した単位として他の世界と関係を有する場合がある (Clarke, 1991: 123)。こうした社会的世界間で交渉や交換、協働、競争、闘争が行われ、水平的・垂直的な社会関係 (共同関係や支配関係など) が結ばれ、それらの世界の間で共通の意味世界が形成されてくる。ネットワーク分析と異なる点は、社会的世

界論は世界間で行われる交渉や協働、闘争などを重視する点である (Strauss, 1993; Clarke, 1991)。

もちろん社会的世界はそれぞれ独立しているといっても、社会的世界の境界は流動的であることが普通である。社会的世界の境界は特定の意味世界の及ぶ範囲であるが、その及ぶ範囲は変化するので、境界は流動的である。行為者たちは相互作用を行い、行為を共にするなかで、意味世界の及ぶ範囲を変えていく。それまで別の意味世界であったものがひとつの意味世界に包摂されることも、逆にひとつの意味世界から別の意味世界が分化してくることもある。一般に行為者の流入や流出が高い社会的世界では意味世界は不安定であるが、流入者を既存の意味世界に同化できない場合には、その世界の意味世界は多元化する。また、社会的世界内部で分業化や水平的・垂直的分化が進むと、それぞれの領域で独自の意味世界を構成し、意味世界も分化する。さらに、社会的世界は他の社会的世界と交差して複数の世界に同時に属する周縁世界を生み出す。そこでは意味世界は交差しているので、行為の自由度は増し、さらに社会的世界の流動化は進む。

(3)社会的世界は固定したものではなくて生成していく。その基本的な原動力は相互作用 (interaction) にある。

相互作用は行為者が有意味シンボルを用いて他者や自己との間で行う対象の意味の提示と解釈である。ブルーマーのシンボリック相互作用論の意味することは、相互作用は対象の意味を他者や自分自身に指示し、その意味を各自が解釈して、行為の準備をすることである。相互作用は行為者に対象の意味に基づいて行為を行う用意をさせるのである。

行為者は他者との相互作用を通じて他者との間で対象についての共通の意味を構成し、それに基づいて互いに行為を遂行する。行為者の間になんらかの社会的な行為が可能となるのは行為者間に対象についての意味が共有されている場合である。行為者は他者と社会的な行為を行うために相互作用を通じて互いに共有された意味を構成しようとする。相互作用を通じて行為者間に共有されている意味は特定の対象に限定されたものでなくて諸対象の意味のセットとなっているが、こうした共有された意味のセットが「状況の定義」(definition of situation) である。当初「状況の定義」が構成される段階では、行為者間で対象の意味をめぐる交渉や駆け引き、闘争、議論が行われ、その過程で優位となったり、同意を得た意味のセットが「状況の定義」となる。そして、ひとたび形成された「状況の定義」は問題が生じない限り、あるいはその意味への挑戦がなされない限り、習慣化して反復される傾向がある。

さらに行為者は自分自身とも相互作用する。有意味シンボルを用いて、自らに対象の意味を指示し、その意味を解釈して、しかるべき行為を考える。行使者がすぐに反応するのではなくてこうした自己との相互作用によって行為を選択する精神の内的過程をミードは「思考」と呼ぶ。思考によって、行為が選択され、新規な行為が創造されてくるのである。

相互作用はこのように他者との相互作用や自己との相互作用を通じて、行為者間に社会的な行為を組織化したり、新規な行為を生み出す原動力ないし母胎となっている。相互作用を欠いた社会的世界はその生命力を失っていくことになる。

(4)意味世界の制度化によって社会的世界の存

続と制度的行為が可能となる。

社会的世界の範囲が拡大し、複雑さが増してくると、その世界を継続させていくためには「状況の定義」を体系化し、より安定化させることが重要となる。社会的世界がその場限りのものとしてごく狭い空間で展開されるだけならば、相互作用だけで十分対応できるかもしれない。しかし、行為や集合的活動を持続的で、かつ大規模に、組織的に遂行すること、すなわち制度的行為が可能のように、意味世界を確立する必要がある。意味世界を確立する過程を制度化とよぶ。ミード (Mead, 1934) がいうように「一般化された社会的態度」を呼び起こすことで、行為者間で組織的行為を行うことが可能となるが、それには意味世界がそれに相応しいものに制度化されていなくてはならない。

意味世界の根底は有意味シンボルであるが、有意味シンボルによって典型的に意味づけられた諸々の対象（時間・空間の分節化、人・もの・観念・自然の類型化など）から構成されている。対象についての「類型」的知識を有することで、人びとは互いに対象についての基本的な認識を共有するようになる。

さらに、意味世界は対象がなにであるのかを示すだけでなく、対象に対して「何をすべきである」「何をしてはならない」という指示をなす。こうした指示は「規範」として明示される。対象（人・もの・観念）に対する行為の仕方や、対象（特に資源や報酬）の所有と配分の仕方、さらに社会関係にある人びとの相互の義務や責任についての「規範」を定めることによって、意味世界は行為者に行為の仕方（役割）を指示し、規制する。

同時に、意味世界は自らの正統性を主張するために、意味世界を根拠づける理論を生み出す

(Berger and Luckmann, 1966)。たとえばそれはかくなる婚姻制度や政治制度を保持していることの原因を説明するもので、伝統に訴える単純なものから、科学的知識や入念な教義で理論武装したものまでである。

さらに、意味世界は継続していくために、「社会化」のメカニズムによって若い世代に制度を教え込み、さまざまな「儀礼」を通じて制度の意味を再確認させる。また意味は放置しておけば自由に解釈されたり変容していくものであるので、意味の一義性を確保するために辞書や標準語などによる「公式の意味の管理」がおこなわれる（フーコー）。

最後に、意味世界は自らの世界を無視する者（逸脱者）に対処するために、フォーマルやインフォーマルなコントロールを発展させる。このコントロールは逸脱した者を処罰や排除するだけでなく、病人や保護の対象者を特別な社会的処置の必要な存在として、治療や支援、矯正、教育を行う。また当事者同士のもめごとないしトラブルを、逸脱への対応の仕方とは区別して、調停や和解によって解決するコントロールを制度化する。

以上のことを整理すれば、意味世界の制度化は以下の項目からなる。

- ①有意味シンボルと意味世界（人びとに共通の意味を呼び起こす典型的カテゴリー）。
- ②規範（たとえば、資源など対象と行為者の所有・配分関係、行為者と行為者の社会関係、聖なるものとの関係を規定する規範や行為・活動の仕方を指示する規範）。
- ③正統化の装置（神話や科学的説明）。
- ④意味の再生産の装置（社会化、儀礼、意味の管理）。
- ⑤逸脱者・病人・トラブルのコントロール。

さらに付け加えておくべきことは、意味世界の制度化はどのように推進されるのかということである。形成過程は一応次のような過程が考えられる。第1は、バーガーとルックマン (Berger and Luckmann, 1966) によって述べられているように、人びとの相互作用を通じて構成された局所的な意味世界が反復され、習慣化され、それが継承され歴史性を帯びることで客観化され、自明視されてくる場合である。第2は、社会的世界で行為者が競争や闘争を通じて有利な立場の者や支配者の利益に適った意味世界を形成する場合である。第3は、行為者たちが他の社会の意味世界をモデルにして、それを自分たちの世界にも導入しようとする場合である。ただ意味世界の制度化は一般論では捉えきれないもので、それぞれの社会的世界の歴史に則して具体的に把握することが重要である。

(5)社会的世界が生成していくためには、社会的世界において生じる問題状況に対処する必要がある。

社会的世界において行為者は制度的行為を遂行しているが、社会的世界は絶えずさまざまな「問題状況」に直面する世界でもある。問題状況に対応していくことが社会的世界の生成には不可欠である。社会的世界で生じる問題状況は、たとえば政治的混乱、経済の停滞、文化・人種・民族間の葛藤、地域の安全性の減少、犯罪の増加、公共財の維持困難、生活水準の低下、組織活動の衰退、あるいは資本や企業的外部世界への流失、新しい技術開発や科学的知識の停滞、環境破壊、階層間の格差拡大など多様である。もちろん何が問題状況とみなされるかは、客観的な状況によって判断されるものではなくて、行為者の相互作用を通じて社会的に構築されるものである。相互作用でより大きな影

響力を発揮した者の考え方に問題状況の定義は左右される。

もちろんヨアスがいうように (Joas, 1992: 133)、プラグマティズムの行為論によれば問題状況に直面することは日常的なことで、それを解決しなければ社会的世界が存続できなくなるという大げさな類のものばかりではない。習慣的行為は状況でたえずいろいろな障害に直面して遂行できなくなったり、同時に追求する目標が排他的であることが判明したり、他者から行為の目標に疑問を呈されることなどもあり、こうした行為の危機に際してその状況に応じて行為は新たに再定義され、別のやり方で遂行される。こうした日常的に見出される普段の問題解決を無視するわけではないが、社会的世界論の視点は上にあげたような比較的大きな問題状況に注目する。

いずれにせよ社会的世界はこうした問題状況とみなされる事態に対処することで、社会的世界は生成していく。それが的確になされなければ社会的世界は衰退に向かう。問題状況への対応には行為者が思考を働かせることや、他者からの示唆、解決のためのアイデアを実行するために行為者間の協力や支援が必要であることはいうまでもないが、問題解決は相互作用や集合行為を遂行するなかから生まれてくることが多い。シカゴ学派が注目したストライキや人種・民族葛藤、コミュニティの争いなどはその例である (Chicago Commission on Race Relations, 1922)。こうした闘争・紛争を通じて解決を模索し、議論するアリーナが創造性の源となる。

(6)社会的世界の生成過程はその構成要素とシステムの変化から捉えることができる。

社会的世界の変化は具体的にはその世界の及ぶ空間的範囲の拡大・縮小、そこに含まれる人

口の増加・減少，制度的行為の活動量（生産・交換・消費）の増加・停滞・減少，世界内部構造の分化や組織化，意味世界の変容，社会関係の緊張・対立の激化・減少，資源・負の資源の増減，さらに他の社会的世界との社会関係の変化等において捉えることができる。さらに，社会的世界の諸要素は互いに関連し全体としてシステムを構成しているが，ラディカルなシステムの変化はそれまでの社会世界とは違う世界への転換をもたらす。

ではこうした変化はどのようにして引き起こされるのか。たとえば社会的世界が成長する契機として，次のようなことをあげることができる。

- ①外部からの人口流入による行為者の量的・質的拡大。
- ②行為によって生産されたものがさらなる行為のための資源として活用され，行為が一段と活性化し，資源の蓄積が進む。
- ③社会的世界の制度化が進み，大規模で組織的な行為・活動が可能となる。
- ④社会的世界の内部に生じてくる種々の問題状況に対処する能力が高まる。
- ⑤他の社会的世界を支配したり，社会関係を結ぶことで，社会的世界の範囲を拡大する。

これらの中で，重要なものは四番目の問題状況への対処能力である。問題状況に有効に対処して，自ら変化を遂げていく適応こそ，社会的世界の持続的な生成の鍵となるものである。

#### 4 社会世界の分析方法

以上，社会的世界論の社会についての理論的視点について述べてきた。こうした視点で社会を研究する場合，基本的な研究課題となるのは

次の2点である。

第1は，対象とする社会的世界やそこで生じる出来事が「何であるのか」を特定する。

第2は，対象とする社会的世界やそこに生じる出来事がどのようにして生成してくる(becoming)のかを明らかにする。

こうした課題を達成するには，それに相応しい方法論を必要とする。方法論についてはデータや検証，真理性など論ずべき点が多いが，本稿では基本的な分析方法について説明しておきたい。

##### (1)対象は何であるのか

まず，研究対象とする社会的世界や出来事が何であるのかということはア・プリオリに定義すればすむというものではない。対象が何であるのかを明らかにすること自体が研究課題である。歴史学にとってフランス革命が何であったのか，何が起きたのかを明らかにすることは研究の重要な課題であるように(新田, 1983)，社会的世界論においても1910年代のポーランド移民がシカゴのポーランド人街で過ごした世界はいかなる世界であったのか，1920年のシカゴの人種暴動で何が起きたのか，さらに遷移地帯に暮らす少年たちの多くが加わった街頭のギャングはどのような集団であったのかを明らかにすることが重要である。そのための分析法として次の点をあげることができる。

1. 対象が何であるのかを明らかにするためにはまず対象の記述が必要である。記述をより明確にかつ分析的に進めるには，社会的世界論で用いた一連の概念が役立つ。社会的世界はどのような意味世界の下で，いかなる行為者たちが，どのような相互作用を行い，いかなる社会関係を結び，どのような資源を活用して，特定の行為をおこなっているのかを明らかにするこ

とで、少なくとも社会的世界がどのような世界であるのかが分かる。確かにアンダーソンのホボの世界やスラッシャーのギャングの世界、クレッシーのタクシー・ダンスホールの世界、シヨウの非行の世界の記述には、そうした概念はかならずしも用いられず、もっとみずみずしい言葉で語られているが、世界を分析するにはそれなりに的確な概念が必要であり、異なった世界も共通の概念で記述されることで、それらの世界についての知識が共有される。

2. さらに、対象が何であるのかを明らかにするには記述だけではなく、別の対象と対比し、それらを差異化することで、対象が何であるのかということは明確になる。ゾーボーはシカゴのニア・ノース・サイドに暮らす人びとの世界を研究しているが、ゴールド・コーストの豊かな住人や間借り人街に暮らす孤独な人びと、スラム地域の移民居住区、歓楽街、ポヘミアンのたむろする自由な街頭、黒人地帯などを対比することで、それぞれの世界の特徴を浮き彫りにすることに成功している (Zorbaugh, 1929)。さらに、ゾーボーのモノグラフを敷衍してアボットはいう (Abbott, 1999: 202)。ある時点の特定の地域だけを見ては、その地域のことは分からない。時間・空間の比較の視点が必要である。その地域の経済構造や移民人口の構成が時代とともにどのように変わっていき、貸間の住人が短期間にどれだけ入れ替わっているのかを知り、さらにその地域は都市全体からどのように分離したり相互依存しているのか、また教区民の移動で生じる教会信者たちの融合など、時間的経緯や空間的配置などの相互の関係を把握することで、はじめてニア・ノース・サイドの流動的で複雑な社会的世界の特徴が明らかになる。対象の比較は対象を差異化し

て、対象が何であるのかを明確にする。

3. 対象が何であるのかを明らかにするには、対象を分解するだけでなく全体を総合して捉えるシステムの思考が有効である。社会的世界の構成要素がそれぞれどのようなものであるのかを明らかにすると同時に、構成要素間の相互の関係や諸要素全体のシステムを見出すことで、社会的世界の特徴は一層明確になる。システム概念自体は社会学では多義的に用いられているが、要素への分解だけでは見落とすことを、全体に光りを当てることで認識しようとする方法を、ここではシステム分析とよんでいる。別のところでシカゴ学派の逸脱ビジネスの世界の研究について述べたが (宝月, 2009)、その世界は「ビジネスによる利得」「需要」「社会的損失」「規制」「参入への誘因」の要因から構成されているシステムとして捉えることができる。こうした要因の背後にはビジネスの担い手や顧客、被害者、統制者、地域住民、メディアなどがあるわけであるが、先の5つの要因の相互関連のシステムとして逸脱ビジネスを捉えることで、逸脱ビジネス世界に関与する個々の行為者や部分的な関係だけをみてはわからないその世界を可能にしている制度化された市場システムが見えてくる。その世界はまっとうなビジネス世界とシステムにおいて同型である。

4. さらに、対象が何であるのかをあきらかにするには、分析軸を用いた対象の分類が有効である。分類は対象を実態的に捉えるのではなく、関係的に思考するとき力を発揮する。プラグマティズムとの親近性があるといわれるブルデューによって (Bourdieu and Wacquant, 1992: 122; Gross, 2009: 367)、それは端的に実践されている。彼は「慣習行動 (プラティック) や消費行動を、たがいに置換可能な種々の

全体集合から切り離し]、「社会的位置と趣味や慣習行動との間の照応関係を、ひとつの機械的で直接的な関係として捉えてしまう」実態論的認識を避けようとする。そのために、経済資本と文化資本の総量の大小を縦軸に、資本の総量において文化資本と経済資本がそれぞれ占めている比重を横軸にし、これら二軸の交差から社会的位置の全体集合の類型を構成する。各々の社会的位置は示唆的な隔差の体系であり、各位置の存在状態に結びついた社会的条件づけの産物であるハビトゥスの集合が各位置に対応している。さらにこれらのハビトゥスとその生成能力を媒介として、たがいにスタイルの親近性によって結びつけられている財や特性の体系的な集合に対応している (Bourdies, 1998, 訳17-25頁)。関係の思考は空間での社会的位置の全体集合を想定し、各位置とハビトゥスとの対応、さらにハビトゥスと財や慣習行動の対応を明らかにしていくことで、それぞれ特徴的なライフスタイルを明らかにするものである。全体集合を構成することで研究している対象は、可能態の一特殊ケース (a particular case of the possible) として位置づけられ (Swartz, 1997: 62), その位置から対象が何であるのかは明白になる。

以上のように社会的世界論の立場から対象が何であるのかを明らかにするには、社会的世界の構成要素の記述、別の世界との比較、諸要素全体を捉えるシステム分析、さらに分類 (全体集合の構成による位置づけ) などの方法が有効である。

## (2)生成過程の分析

社会的世界やそこに含まれる出来事がいかにして生じてくるのかを明らかにする課題に、社会的世界論はどう向き合うのであろうか。生成

過程は現代では因果分析やメカニズム分析、さらに歴史哲学のナラティブ (物語) 理論によって論じられている。シカゴ学派のなかではズナニエッキの発生的分析と因果変動の古典的な研究がある。まずこれから取り上げよう。

ズナニエッキは『社会学の方法』(Znaniecki, 1934) で、システムの構成要素間の支配的要因と従属的要因との関係を特定化して、システムの進化を明らかにしようとした。彼によればシステムの構造は諸要素の結合からなる閉鎖系であるが、彼のシステムの特徴は諸要素の中で本質的な要素とそうではないものとを区別する点である。本質的な要素がシステムをより特徴づける支配的な位置を占めており、本質的な要素とそうでないものとの間にヒエラルキーが存在する。本質的でない要素は本質的なものに依存するとみなし、この関係を「構造的依存性の原理」とよぶ (Znaniecki, 1934: 270, 訳229)。本質的な要因すなわち支配的な要因は固体発生の最初の段階から含まれていたものであり、それ以外の要因はそれに付随した要因である。こうした本質的な要因を特定することが「固体発生分析」である。

さらに、本質的な要因 (A) に新たに諸要因 (b, c, d,) が加わることでシステムは進化していく。あらたに発生したシステムはすべて本質的な支配的要因 (A) を保持し、各システムの差異は新たに加わった要因によって生じる。一見異なるシステム (A+b, A+ c, A+d) も同じ系統から発生したものである。こうした進化過程を把握することが「系統発生的分析」である。こうしたシステム間にはつながりがあり、そのうちのひとつはもうひとつの変種である。こうした進化では先行するシステムの諸要素とそれらの布置連関は後続するシステムを条件づ

けても、それを必然的に発生させる原因とはならない。そこには創造的な可能性を秘めており、いろいろな変種の発生の可能性がある。

これと対比される生成過程が「因果変動」である。それはシステムの構成要素やその組成が別のものに変化するものである。ズナニエッキによれば、こうした変化は意図されなかった外的影響がシステムに及ぶ場合とシステム内からシステムを再組織することによって生じる。彼は次のような例を挙げる。移民の子どもはコミュニティで他の子どもたちと接触して、自分の両親の文化的規準を軽蔑するようになる。子どもは両親がもっていない価値基準を受け入れることで、価値判断上の葛藤が生じ、本来の親子関係の持続は難しくなり、新たな親子関係の再組織化が必要となる。新たな基準が親子の間で確立されれば、それまでと違った親子関係が生まれる (Znaniecki, 1934: 299, 訳258-259)。こうした事例は集団に生じた価値障害が適切に対処されれば、先行するシステムから後続システムが出てくるということを表している。前者から後者は必然的に出てくると主張するとなると、それは因果法則の承認になるが、はたしてそうした因果法則を見出すことができるのか。ズナニエッキはその可能性を信じている。すなわち、「文化には、もしそれにたいして妥当な方法が適用されれば、絶対に非合理的で論理的に理解しえないような対象は存在しないしプロセスも存在しない」という (Znaniecki, 1934: 305, 訳262)。

過程分析を行う場合に以上のズナニエッキの方法をそのまま踏襲するのではなくて検討が必要である。第1に、彼の発生分析は社会的世界の構成要素のなかから本質的な要素とそれに依存するものとを区別する「構造依存性」の原理

に基礎づけられているが、何が本質的な要素であるのかを判別することは容易でないし、要因間の関係がむしろ重要であり、あえて本質的なものを見出す必要もない。第2に、発生分析で彼が明らかにしたように、システムの進化過程は先行するシステムの構成要素や組成に条件づけられていても、そこからいろいろなシステムが創造される余地を認めることは、決定論でない過程にも目を向ける点からも必要である。第3に、彼はシステム間の因果関係に法則を見出そうとしているが、実際はそうした確たる法則はいまだにない。むしろ、要因間の関係をより詳細にプロセスとして辿っていく方が適切である。第4に、因果分析のなかで行為が果す役割をどのように扱うのかはズナニエッキも苦心した点であるが (Znaniecki, 1934: 296, 訳254頁)、行為と因果関係をあらためて問直す必要がある。以下ではこのうち争点となる第3と第4番目を取り上げる。

最初の問題であるが、原因と結果の関係を説明する普遍的な因果法則に対する懐疑は強い。それに代わるものとして、最近では原因と結果の間を媒介する過程 (process) とくにそのメカニズムに関心が向けられている (Spillman, 2004; Abbott, 2001)。メカニズムの概念は多様な使い方がなされており、グロースはその論点を次のようにまとめている (Gross, 2009: 362-363)。第1に社会的メカニズムは原因と結果を媒介するという意味で因果的である。第2に社会的メカニズムは時間的に展開していく。第3に社会的メカニズムは程度の差はあるにせよ普遍性のあるものである。第4に社会的メカニズムは媒介するものであるため、被説明項よりも複雑性や集合性の度合いはより低い位で分析される要素から構成されている。こうした主張を

受け入れるかどうか論点となるわけであるが、本稿も媒介性の主張を一応受け入れている。その上で、社会的メカニズムを次のように定義する。すなわち、メカニズムとは社会的世界を構成する諸要因間において、似たような様式でこれらの関係に因果的な変化を引き起こす出来事や行為である。そして、こうしたメカニズムの連続によって社会過程 (social process) は構成され、この社会過程に基づいて社会的世界は生成していく。これまでの因果分析のように原因と結果の間をブラックボックスにしたまま両者の相関を特定し、両者の関係を説明する普遍的な法則 (カバー法則) を見出そうとするのではなく、メカニズム分析は原因と結果を結ぶ関係をいくつかのメカニズムに分解し、それらの連関から関係の変化を丁寧に辿ろうとするものである。こうしたメカニズム概念は紛争の歴史的事件の生成過程の研究に、マックアダムやタロー、ティリー (McAdam, Tarrow and Tilly, 2001) によって活用されており、因果法則よりも社会の生成過程の分析にはこの方法が有効であると思われる。

次に第二の論点である因果関係と行為について取り上げる。アボットによれば、デュルケームは因果関係を行為と切り離しておらず、社会のリアリティは実際の行為によって支配されており、因果関係はこうした行為を決定するもの (ただし、行為の創発特性も認めている) と考えていたという (Abbott, 2001: 112-114)。行為から切り離して因果の概念を変数間の蓋然性として捉えるようになったのは、ダンカンやブラロックなどの1960年代前後の「新因果主義」以降のことであるという。こうした趨勢のなかで因果関係から行為は排除されていったが、最近では反動として、行為の復権への志向がみられ

る。そのひとつは歴史哲学の分野にみられる。そこでは因果法則に変わるものとして「ナラティブ理論」が注目されているが、そのかなで行為にしかるべき位置が与えられている。「ナラティブ理論」にはいくつかのバリエーションがある。アボットによれば、それには歴史の登場人物の行為や意図を状況とともに理解しようとするモデルから、一貫した、真実性のある、中心的なテーマによって辿りえる (followability) ひとつの物語を語ることで出来事の生成を説明する方法、さらにはいくつかの歴史的な断片や部分を配列し総合することで、たとえばさまざまな出来事を筋書きに沿ってひとつの「革命」とよばれる物語に総合する方法 (colligation) などである (Abbott, 2001: 112-113)。いずれの場合もひとつの歴史的出来事の生成を説明するのは行為と状況、それらの配列、そしてそれらの時間的つながりである<sup>5)</sup>。

アボット自身はこうしたナラティブに好意的で、自らの立場を「相互作用フィールド」と名付ける。たとえば、専門職の世界の生成は特定の専門職だけを取り上げては、その過程は理解できない。専門職の世界では関連する専門職同士が縄張りを巡って競争している。それは特定のコミュニティで異なる民族・人種が居住地や職をめぐる闘争しているのと同じである。技術や組織の発展でこのフィールドには新たな勢力が参入してきて、支配権をめぐる争いが激化する。専門職の歴史は競合する集団間の歴史であり、闘争を通じて段階的に変化していく (Abbott, 1988)。アボットは「相互作用フィールド」の視点を次のようにまとめている (Abbott, 2001: 124)。社会的世界の作動に自由な行為の余地を認め、さまざまな幅のある時間の影響を受けて現在の世界は形成されているこ

とを認識し、さらに社会的世界に浸透している複雑な社会構造を理解する必要がある。こうした視点に基づく研究を実践するには、アボットは計量的手法やシミュレーションが必要となるという (Abbott, 2001: 124)。

社会的世界論の生成過程を分析するには、メカニズムと因果関係に行為を取り込むことが重要である。ただ、アボットは計量的手法やシミュレーションに比重を置くが、社会的世界論はそれらだけでなく質的方法も重視する。こうした違いは一応別にして、社会的世界の生成過程の分析に行為やメカニズムを繰り返して行うとすれば、それはいかなるものとなるのか。以下のような分析方法が考えられる。

1. 社会的世界の生成はその諸構成要素やシステムが変化することであるが、それは社会的メカニズムによって可能となる。

2. 社会的メカニズムは要因やシステム間に作用して、その関係に変化を引き起こす出来事や行為であるが、その行為がどのようなものであるのかということ、それらがどのような状況で生まれるのかを特定する必要がある。行為は問題解決行為と慣習的行為の交代として捉えることができるが、特に問題解決行為がどのような状況でいかに行われるのかを把握する。

3. さらに、こうしたメカニズムによる変化の連関が社会過程を構成するが、この過程は因果的に必然であるというよりは、多くは条件依存的である。どのような条件の下で、連関が可能になるのかを特定する必要がある。

4. 社会的過程によって可能となる社会的世界の生成は、その構成要素やシステムが連続性を保って変化していく場合と、別のものに変質する場合があるが、こうした違いや転換点はどのような社会過程から生じるのかを特定する<sup>6)</sup>。

## おわりに

シカゴ学派の理論的視点として社会的世界論とその分析の仕方について述べてきた。そこからシカゴ学派のモノグラフの再解釈を展開していくことが課題となるが、その前にシカゴ学派を継承しているブルマー (Blumer, 1969:) の「自然主義的方法」やグレイザーとストラウス (Glaser and Strauss, 1967) の「グラウンディド理論」、ベッカー (Becker, 1998: 109) らの「分析的帰納法」、デンジンの「解釈学的相互詳論」(Denzin, 1989)、プロヴォイ (Burawoy, 1991; 1998) の「拡大事例研究法」などを含めて方法論を再検討しておく課題がある<sup>7)</sup>。こうした点に関しては稿をあらためて行いたい。

## 注

- 1) 以下1節と2節の内容は以前発表した拙論文 (2001) を大幅に書き直したものである。
- 2) 科学世界へ社会的世界の概念の活用は、フジムラ (Fujimura, 1996) の癌研究分野でなされ、研究法の「標準化」の進展過程が明らかにされている。さらにウルマー (Ulmer, 1997) によって裁判の社会的世界の研究に活用され、法廷で審判がいかに行われるのかを、エスノグラフィのような質的な研究に計量的方法を併用して明らかにしている。
- 3) 行為者は性・年齢・国籍・人種・身体的特徴はもとより、学歴・職業・地位・キャリア・能力・性格・道徳性などさまざまなカテゴリーによって類別化される。
- 4) プラグマティズムの行為論はストラウスの晩期の著書 (Strauss, 1993: 21-46) でも展開されている。
- 5) 歴史分析に関する理論の整理としては Griffin, 1993が示唆的である。
- 6) この分析の具体例として、拙稿の『ジャッ

ク・ローラー』の解釈を挙げておきたい(宝月, 1990. 第4章)。

- 7) シカゴ派の方法論の紹介や問題点についての検討は不十分ながら別のところで行ったことがある(宝月, 1999, 2000a, 2000b)。

### 参考文献

- Abbott, Andrew. 1988. *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*. University of Chicago Press.
- . 1999. *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*. University of Chicago Press.
- . 2001. *Time Matters: On Theory and Method*. University of Chicago Press.
- Anderson, Nels. 1923. *The Hobo: The Sociology of the Homeless Men*. University of Chicago Press. (広田康生訳『ホーボー』上, 下ハーベスト社, 1999・2000.)
- Becker, Howard. S. 1982. *Art Worlds*. University of California Press.
- . 1998. *Tricks of the Trade: How to Think about Your Research While You're Doing It*. University of Chicago Press.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann. 1966. *The Social Construction of Reality*. Anchor. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977.)
- Blumer, Herbert. 1969. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Prentice-Hall. (後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房, 1991.)
- Bourdieu, Pierre. 1994. *Raisons Pratiques*. Seuil (加藤晴久・ほか訳『実践理性』藤原書店, 2007.)
- Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant. 1992. *An Invitation to Reflexive Sociology*. University of Chicago Press.
- Burawoy, Michael. 1998. "The Extended Case Method." *Sociological Theory* 16: 4-33.
- Chapoulie, Jean-Michel. 1996. "Everett Hughes and the Chicago Tradition." *Sociological Theory*. Vol.14: 3-29.
- Chicago Commission on Race Relations. 1922. *The Negro in Chicago: A Study of Race Relations and Race Riot in 1919*. University of Chicago Press.
- Clarke, Adele E. 1991. Social Worlds/Arenas Theory as Organizational Theory. in Maines, David R. ed. *Social Organization and Social Process*. Aldine.
- . 1998. *Disciplining Reproduction: Modernity, American Life Sciences, and the Problems of Sex*. University of California Press.
- Cressey, Paul G. 1932. *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*. University of Chicago Press.
- Denzin, Norman K. 1989. *Interpretive Interactionism*. Sage. (関西現象学学会編訳『エピファニーの社会学』マグロウヒル, 1992.)
- Fujimura, Joan H. 1996. *Creating Science: A Sociohistory of the Quest for Genetics of Cancer*. Harvard University Press.
- Glaser, Barney G. and Anselm Strauss. 1967. *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine. (後藤隆ほか訳『データ対話型理論の発見』新曜社, 1996.)
- Goffman, Irving. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Doubleday, Anchor Books. (浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版会, 2002.)
- . 1969. *Strategic Interaction*. University of Pennsylvania.
- . 1974. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Harvard University Press.
- Griffin, L. J. 1993. "Narrative, Event-Structure Analysis, and Causal Interpretation in Historical Sociology." *American Journal of Sociology* 98: 1094-1133.
- Gross, Neil. 2000. "A Pragmatist Theory of Social Mechanism." *American Sociological Review*. 74: 358-379.
- 宝月 誠. 1990. 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣.
- . 1999. 「自然主義的探求法の検討: プルマーの方法論の問題点」奈良女子大学社会学論集 6号: 177-188.

- . 2000a. 「物語的社会学の原点：トマスとズナニエッキの『ポーランド農民』第三部を中心に」日本社会学史研究, 22号：39-48.
- . 2000b. 「科学的世界と修行：『質的研究法』を事例にして」長谷正當研究代表『修行の総合研究』平成12年科学研究補助金（一般研究（A））研究成果報告書.
- . 2001. 「シカゴ学派の社会認識」中野正大代表編『シカゴ学派の総合的研究』平成10～平成12年度科学研究補助金（基盤研究（B））研究成果報告書, 京都工芸繊維大学.
- . 2006. 「シカゴ学派の方法論再検討」中野正大編『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』平成14年度～平成17年度科学研究補助助成金（基盤研究（B））研究成果報告書, 京都工芸繊維大学.
- . 2009. 「逸脱ビジネスの社会的世界」『立命館産業社会論集』第44-4号：1-19. 立命館産業社会研究会.
- 宝月誠・中野正大編. 1997. 『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣.
- 宝月誠・吉原直樹編. 2004. 『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣.
- Joas, Hans. 1966. *The Creativity of Action*. Polity Press.
- Kiser, E. and M. Hechter. 1991. "The Role of General Theory in Comparative -historical Sociology." *American Journal of Sociology* 97: 1-30.
- Lengermann, Patricia Madoo. 1997. "Robert E. Park and the Theoretical Content of Chicago Sociology: 1920-1940." *The Chicago School: Critical Assessments*. Vol.11. edited by Ken Plummer. Routledge.
- McAdam, Doug, Sidney Tarrow and Charles Tilly. 2001. *Dynamics of Contention*. Cambridge University Press.
- Mead, G. H. 1934. *Mind, Self and Society*. University of Chicago Press. (稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店, 1973.)
- 中野正大・宝月誠編. 2003. 『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- 新田義弘. 1983. 「歴史科学における物語り行為について」『思想』712号：69-86.
- Park, Robert E. 1952. (edited by E. C. Hughes, et al.) *Human Communities*. The Free Press.
- . 1967. (edited by Ralph H. Turner). *Robert Park: On Social Control and Collective Behavior*. University of Chicago Press.
- Park, Robert E., Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie. 1925. *The City*. University of Chicago Press. (大道安二郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会, 1972.)
- Park, Robert E and Ernest W. Burgess. 1921. *Introduction to the Science of Sociology*. University of Chicago Press.
- Reckless, Walter C. 1933. *Vice in Chicago*. University of Chicago Press.
- Shaw, Clifford. R. 1930. *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*. (玉井眞理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東洋館, 1998.)
- Shibutani, Tamotsu. 1986. *Social Processes*. University of California Press.
- Short, James. F. Jr. ed. 1971. *The Social Fabric of the Metropolis: Contributions of the Chicago School of Urban Sociology*. University of Chicago Press.
- Strauss, Anselm. 1978. "A Social World Perspective." In *Studies in Symbolic Interaction* 1: 119-128.
- . 1982. "Social Worlds and Legitimation Processes." in *Studies in Symbolic Interaction* 4: 171-190.
- . 1984. "Social Worlds and Their Segmentation Processes." in *Studies in Symbolic Interaction* 5: 123-139.
- . 1993. *Continual Permutations of Action*. Aldine.
- Spillman, Lyn. 2004. "Causal Reasoning, Historical Logic, and Sociological Explanation." in Alexander Jeffrey C. et al. eds *Self, Social Structure, and Beliefs: Explorations in Sociology*. University of California Press.
- Swartz, David. 1997. *Culture & Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*. University of

- Chicago Press.
- Thomas, W. I. and Florian Znaniecki, 1918-20. *The Polish Peasant in Europe and America*. 5 vols. University of Chicago Press and R. G. Badger. (桜井厚訳『生活史の社会学』御茶の水書房, 1983. 部分訳);. 1927 [1958]..2 vols. Alfred A. Knoph [Dover].
- Thrasher, Frederic M. 1927. *The Gang: A Study of 1,313 Gangs in Chicago*. University of Chicago Press.
- Ulmer Jeffery T. 1997. *Social Worlds of Sentencing: Court Communities Sentencing Guidelines*. State University of New York Press.
- Winkin, Yves.1988. *Les Moments et Leurs Hommes*. Seuil/Minuit. (石黒毅訳『アーヴィング・ゴッフマン』, せりか書房, 1999.)
- Znaniecki, Florian, 1934. *The Method of Sociology*. Farrar & Rinehart. (下田直春訳『社会学の方法』新泉社, 1971.)
- Zorbaugh, Harvey W.. 1929. *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*. University of Chicago Press. (吉原直樹ほか訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社, 1997.)

## Theoretical Perspective of the Chicago School of Sociology

HOGETSU Makoto \*

**Abstract:** The Chicago School of Sociology is one of the intellectual sources for sociological imagination to reconsider current sociology. The purpose of this paper is to explore theoretical perspective and analytical methods through a review of the Chicago School of Sociology. In this paper, Social World Perspective is propounded. It is constituted of significant world, attitude-taking theory and Pragmatism action-theory. In addition to these elements, Social World Perspective brings in the theories of social relations, resources and social capital. When we want to understand the characteristics of any specific social world or event which is an object of our study by using Social World Perspective, it is important to make use of the comparative method, system analysis and relational thinking. Researching the social becoming processes of any social world or event, this perspective favors social mechanism analysis over causality, and it also attaches more importance to action or social process than variables or statistical analysis. In addition, we should carefully explain how these actions and processes are contingent on social conditions, not pre-determined.

**Keywords:** the Chicago School of Sociology, Social World Perspective, action, mechanism, process analysis

---

\* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University